不定期刊行　　第610号　2017.04.22

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者　大西　浩

大町岳陽高校の３月合宿(山スキー三昧 その5)

栃木県で雪崩事故の起こる直前、大町岳陽高校では3月22日～23日に冬山合宿を行った。敢えて冬山と書いたが、計画書にもそのように記載し、保護者にも学校にもそう届けて理解をしてもらったうえでの合宿だからここでもそう書いた。かわらばん604号から606号に書いた通り、今年も12月からステップアップしながら、継続的に冬の活動を続けてきた。この合宿はその活動の集大成と位置付けている。だから、冬合宿なのだ。これは私のこだわりでもある。したがって、今回の雪崩事故のあと、言葉だけが独り歩きしているかのような、「高校生は原則として冬山登山は禁止」ということにというときの「冬山」が何を意味するかということとは次元が違う大町岳陽高校山岳部の活動スパンにおける「冬山」であることをまず明記しておきたい。

さて、合宿の山域は乗鞍岳。池工時代の4年間、大町へきての3年間、一貫している。宿泊は位ヶ原の下部で雪洞泊をし、足は生徒の状況により、山スキーまたはボード・ツボ足の混成部隊というスタイルも変えていない。今回は、山スキーの生徒が7人、4人が歩きという陣容だった。

22日は好天で、最高のコンディションであった。顧問の関係で全員を車に乗せきれなかったため、一部は公共交通機関での移動にしたため、出発が例年より1時間余り遅くなった。13時無風快晴の中、ゲレンデトップを出発。最初の急斜面に向かう。久しぶりの重い荷物に雪の急斜面。ここは歩きでもスキーでも生徒にとっては雪山の洗礼を受ける場所である。標高差120mほどをゆっくり登り、一本取る。ここまで登り切れば、あとは傾斜がおちる。歩きづらさは一気に減る。春分の日を過ぎれば日も長くなってきているので、慌てることもない。弱い生徒に合わせながら、雪山を楽しみながら登っていく。15:10位ヶ原の100mほど下部のいつもの場所を幕営地点とする。去年は雪が少なくて雪洞を掘るのに往生したが、今年は雪の量もたっぷりあり心配ない。全体を3班にわけ、それぞれに雪洞掘りを始める。コーチで指導してくれている松田氏の厳しい指導。高校山岳部の活動を40年近く見てきて、雪山にも毎年のように連れてきた松田氏の経験則に基づいた雪洞掘りの指導は、まさに高校山岳部の手本である。

かくして一夜の雪の宿は完成した。夕刻より雪が舞い始めたが、雪洞の中は天国だ。朝、生徒に聞くとどの生徒も満足げに「寒くもなかったし、ぐっすり眠れました。」との感想。おそらく、一年生には期待もありながら、一抹の不安も同居する一夜だったに違いないが、案ずるより産むがや

すしとはこのことである。毎年のことだが、生徒たちは僕らが思うより遥かに逞しい。
　朝起きたときは、それほどの悪天とも思わなかったが、山頂を目指しての出発時の天候は最悪だった。風雪強し。7:15、それでも行けるところまで行こうと勇を鼓して出発。しかし、いかんせん状況が悪い。7:22、100m進んで、位ヶ原の登りにかかるところで、先頭の松田氏と顔を見合わせる。撤退。口に出さずとも互いの気持ちはわかる。阿吽の呼吸とはこのことだ。即座に踵を返して雪洞に戻った。
　あとは、一気に下り、9:30 には無事駐車場に戻った。スキーの生徒たちには最高のコンディションであった。下り始めると一気に青空が広がった。しかし、駐車場から山頂を眺めると、雪煙が高く舞い上がっており、空気は 3 月とは思えない冷たさ。やはり撤退は正解であった。

山スキー三昧　その6　若手を誘って白馬乗鞍へ

　昨年度から学年主任をしているが、息子や娘より若い初めて担任を持つ体育のO君と英語のKさんという若者 2 人に刺激をもらいながら、楽しく仕事をしている。1 月に行われた学年行事のスキー教室には、彼らはもとより学年団 6 人がみな、ノリノリでスキーを楽しんだのだが、僕が折に触れて山スキーの話をするのでみな興味津々。一度体験してみたいというO先生と春休みには山スキーに行こうと約束していた。
　決行したのは 3 月 29 日。この日も松田さんに同行を願い出た。O君が誘ったKさんも加えてメンバーは 4 人となった。
　山域は栂池から白馬乗鞍とした。当日は学校に 7 時集合。それでもゆうゆうゴンドラの始発には間に合うのだから、なんと恵まれた立地条件だろう。9 時にロープウェイの山頂駅を歩き出す。最初はぎこちない歩き方の二人。しかし、だんだん慣れてくる。今年は栂池からこの山域に入るのは 3 回目。しかし、過去 2 回は天狗原までしか行かないことが続いていて、白乗の大斜面が呼んでいるのを指をくわえている状態だった。

　しかし、この日は天気もよく、雪も安定化に向かっていたので、無風快晴の中を頂上まで行くことができた。さすがに頂上付近は風が吹いていたが、まさに「天気が良ければ山は最高」を地で行くような山行だった。
　頂上からの大滑降を久しぶりに満喫し、初体験の二人も満足の笑顔だった。

編集子のひとりごと

　山は天気がすべて。今回紹介した山行も好天と悪天のそれぞれの報告である。・・・栃木県の事故のことがずっと頭の中をよぎって離れることはない。去る 16 日第 1 回の検討委員会が宇都宮市で開催された。会議の内容のサマリーは栃木県のＨＰ上に紹介されているので、その中身はそちらを参照（まだ議事録はでていない）してほしいが、小生自身きわめて重大な仕事、重い仕事を受けて、責任重大であると感じている。10 人の委員のうち、登山関係者は 3 名。高校現場を知っている登山関係者として、責任のある発言をしたいと思う。そして自分自身の登山も慎重に行わねばと肝に銘じている（大西　記）